

口語的手紙文における字体と絵文字の指標的特性 —その特殊性と普遍性について—

片岡 邦好
愛知大学文学部

1. はじめに

本論考の目的は、書き言葉の意味内容にではなく、それがいかに表出されるかに焦点を当て、字体の操作や絵文字といった「パラ/メタ言語的」特性が談話意図の達成にいかに関与するかを考察することである。その題材として、若い日本人女性によるカジュアルな手紙文を用い、現代の各種メディア談話におけるエモティコンやギャル文字使用にも通底する記号的特徴を探る。

1.1 文化的特性としての指標性

ここにおける鍵概念は「指標性」である。「指標」とは、パース記号学における記号の3類型の一つであり、隣接性にもとづき、ある対象が影響を及ぼす別の事象によって、その対象を間接的に指示するという特性を持つ (Peirce 1955)。その典型的な例は、風見鶏、煙、指示代名詞、メトニミー (換喩) などである。例えば風見鶏は、鳥の似姿そのものを指すというよりも、その頭頂の方向が「風向」を間接的に指し示している。言語人類学者 Silverstein はこの概念を発展させ、言語と文化の生成と変転を考察するための枠組みとして確立した (Silverstein 2003, 2004)。彼の定義によると、指標性とは、「言語使用において、固有の指示作用のみならず、その指示対象にまつわる前提化されたコンテキスト内の条件、社会的役割や特性、権威や地位、敬意や親疎の意識、またその価値などを明示的、非明示的に示す特性」とされる (Silverstein 2004 : ほかに Ochs 1992 ; 片岡 2002a など参照)。

指標性の概念は、「風見鶏」のように語彙のみに関わる現象ではなく、音韻レベル (音形、音質、プロソディー)、統語レベル (ある種の文法構造の使用や不使用)、談話・相互行為レベル (レジスター、ジャンル、「声」、「参与者構造」)、コード・レベル (母国語・外国語、[社会] 方言など)、非言語レベル (ジェスチャーや空間配置) での表出と選択にも関わる広範な概念である。また、指標性は単一性/一回性のみならず、「慣例化」と深く結びついている。この点で、一連の談話におけるトークン (具体的な言語事象) の配置と重複にも関わっている。したがって、指標的効果の安定性と持続性には段階的変異がある。さらに、各々の

トークンは指標的価値の時間的・歴史の変遷を反映し、社会思潮や時代精神から切り離すことができない (Silverstein 2003, 小山 2008)。

1.2 絵文字と字体の指標性

本論考のように、書きことばの形態的特徴を論じる際には、「絵文字」のアイコン的特性と「字体」の規範となる正書法への権威的参照から、まず類像的側面が想起されがちであるが、(1) 字体や絵文字の使用実態は、実は記号の全ての側面に浸透している。その中でも、絵文字／字体の「指標的」機能に焦点を絞ると、(2) 一般の使用者・観察者が内省により特定の解釈に到達できる「直接指標」と、その機能とプロセスが潜在的かつ意識外にある「間接指標」とに大別できる (Ochs 1992)。特に絵文字の分析を通じて、メタ語用論的に慣例化されたテキスト構築上の知識が、その実現形式を通じて浮かび上がる点を検証する。そして絵文字は、(しばしば文字形態と連動して) どのようなコンテキストで、どういった相互行為を実践しているのかを「直接」指標するだけでなく、テキストの構造化を促し、構築過程のどの段階にあるのかを「間接的に」指標する。そして最後に、(3) 絵文字の経年変化は、機能的拡張と意味的漂白化の過程を経て、ことばの「文法化」におけるのと同様の特性に収束し、共通の認知過程を具現化する媒体であることを指摘する。

従来の言語分析では、直接指標に関わる側面が主な対象となってきたが、創造的・詩的機能を含む間接指標への考察が、文化と言語使用の実態を解き明かす鍵になるという認識は徐々に広まりつつある (Silverstein 2003, 2004 ; Friedrich 2006)。これは言語にかかわらず、言語と共起する非言語にも当てはまる現象である。実は「非」言語なるものは、言語との共生を通じて限りなく言語的な創造性を発現するという点が、本論考の包括的な主張である。

2. Emotive Graphic Sign (EGS) の経年変化と社会的背景

本論では Jakobson (1960) の定義を援用し、手紙文において何らかの「情緒的」意図を伝達するために前景化された図画的手段を “Emotive Graphic Sign (EGS)” と称する。当初は、一般的に「エモティコン」と呼ばれる図画記号を想定して Emotive Pictorial Sign と呼んだが (Kataoka 2002b)、ここでは何らかの情緒的意匠を凝らした字体の変異も含めて EGS と総称する。

字体と絵文字の使用は相互依存的であり、不可分の関係に立つ。またその関係は、文字形態と絵文字の経年変化を概観することで徐々に明らかになる (佐竹 1980、山根 1989、大塚 1995、Kataoka 2002b、三宅 2005)。具体的には、1970 年代中期が絵文字の黎明期であり、「丸文字」(あるいは「新言文一致体」(佐竹 1980)、「変体少女文字」(山根 1989)) と呼ばれる意図的に変形された文字形態がその端緒である。(その傾向は 1980 年代初頭 (個人的嗜好としてはそれ

以降)まで続いた。)このような EGS の最大の言語学的意義は、書道に依拠する従来の正書を典範と仰いできた文字形態に、固有の記号的価値を付与したことにある。ここにおいて字体は、典範に依拠することなく、自己の投影として作用する可能性が拓かれたといってもよい。

1980 年代後期には文具メーカー「サンリオ」が出現し、「可愛さ」への嗜好と意識が拡散していった。それと同時に、フェミニズムの台頭に伴う「可愛さ」への反動的嫌悪も徐々に醸成され、丸文字の凋落が始まった時期でもある。その結果、1980 年代末期には「丸文字」を見かけることはほとんどなくなった。1990 年代初頭は、雇用機会均等法にも後押しされ、「バブル期」の恩恵を受けた女性の全能感が浸透し始めた時期でもある。興味深いことに、「角文字」と称される硬質の字体が(短命ながら)出現し、女性が「男性化」する象徴として意識されもした(榊原 1994)。しかしながら、1990 年代中期にバブルが崩壊し、挫折と衰退の機運が社会に漂い始めると、字体の嗜好と絵文字の「意味的」指示対象もある種の「混沌」を呈し始める(以下の分析参照)。その時期は、(少なくとも形態的かつ意味的には)一般母語話者/筆者のリテラシーの枠内に収まりきらない用法の出現により特徴付けられる。そして 21 世紀に入り、「失われた 10 年」を「自分探し」に明け暮れる社会的風潮にも後押しされ、規範からの逸脱(あるいは規範意識の欠如?)を楽しむ「ヘタうま文字」や「ギャル文字」といわれる字体や独特の融合形態を持つ(絵)文字が生まれている。もちろんインターネットに代表される新たなメディア媒体の浸透が、このような特殊文字の創出と拡散を後押ししたことは言うまでもない。

3. データと分析

以下では Kataoka (1995, 1997, 2002b, 2003a, 2003b) における主張を抜粋し、若干の補足を加えながら簡潔に紹介してみたい。本分析のための資料は、主に 10 代後半および 20 代前半の日本人女性による 500 通に及ぶ手紙文、私信やメモから取られている。調査対象としたのは、1980 年代から 2000 年にかけての通信文であるが、1990 年代のデータが中心となっている。私信の収集に際しては、「友人の友人」によるネットワークを利用し、個人が特定できない範囲で実名のまま使用させていただいている。また、近年のインターネット媒体で用いられる事例については、既出の論文(たとえば三宅 2005)や実際のウェブ・ページから採取されたものを用いている。

以下では、文字の形態と絵文字使用の実態を経年的に考察し、EGS の特性として次の 3 点を提案する(ただし網羅的ではない)。

- (1) EGS は記号的流動性(つまり「類像」、「指標」、「象徴」の融合形式)をもつ
- (2) EGS は「直接/間接指標」として機能する
- (3) EGS は共通の(社会)認知過程を具現化する媒体である

そして(3)の実例として、「EGS は言語の『文文化』に近似する特徴を持つ」点を指摘する。

3.1 EGS は記号的流動性を有し多くの融合形式をもつ

EGS は Peirce (1955) の分類にもとづく 3 種類の記号全てにまたがり、かつそれぞれの要素間の融合形が増殖する動的な体系を形成している。まず、Peirce の規定する記号分類に依拠して典型的なエモティコン (emotion+icon) を分類したのが以下の(4)である。ただし図 1 に見られるように、さまざまな融合形が、3 種の記号間にとどまらず、日本語および英語から借用された句読法を取り込む形で、複次的に創発する構造を形成している (Kataoka 2003a)。

- (4) 類像的: ☺ ☺☺ ☺☺☺
 指標的: ♪ ♪♪ ♪♪♪ ♪♪♪♪
 象徴的: ♥ ♡ ○○○

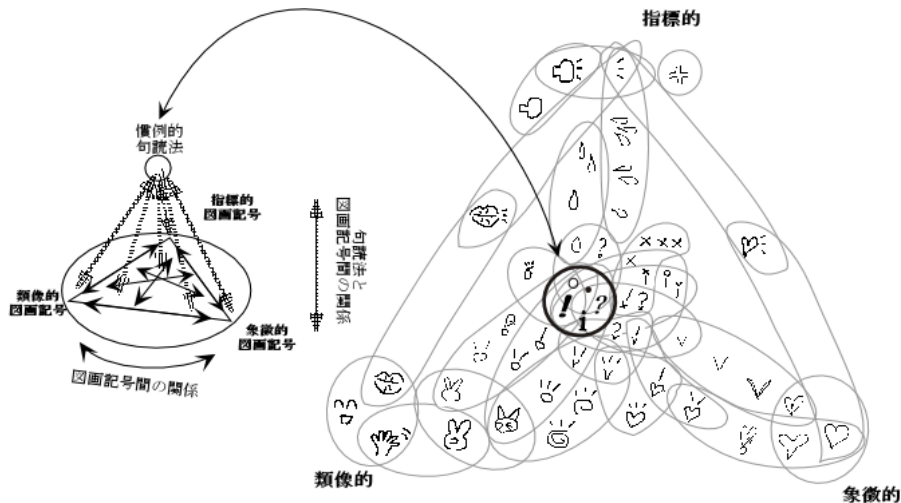


図 1. EGS の記号的流動性と融合 (Kataoka 2003a より抜粋)

3.2 EGS は直接的または間接的にコンテキストや筆者の特性を指標する

EGSは、相互行為のコンテキストや投影された使用者の意図/自己を「直接」または「間接」に指標する媒体である。以下の 3.2.1~3.2.3 において述べられるのは、一般の使用者も内省により一定の解釈に到達できるという点で「直接指標」としての機能にあたるといえる。そして従来の言語分析はこの段階にとどまってきた。しかしその一方で、EGSは^{いんみつ}隠密裡に使用者のテキスト構築上の知識を具現する媒体とも考えられる現象が観察される。3.2.4 ではこの点に言及し、新たな記号論的分析の可能性を提示したい。

3.2.1 談話のコンテキストと相互行為のトーンを指標する

EGS の使用は、特定環境における社会的行為であり、この点で「書く」という行為の実践に

伴う外的要因を指標する。したがって EGS の出現は、書き言葉（特に私信）であり（ただし手話にエモティコンにあたるものが存在するか否は不案内にして定かでない）、カジュアルな（つまり公的でない）、友達同士の、秘密の、情感にあふれた、遊び心のある、といったコンテクストを即時的に醸成する。それゆえ、公的場面での使用は、目上の対話者に対する「タメ口」同様、社会規範上の齟齬を生ずるのが常である。たとえば、丸文字が出現した当初、試験答案でそれを用いた生徒・学生は直接的な懲罰（減点なり採点拒否）を与えられたり、使用そのものを禁止する学校も現れた（山根 1989）。この意味で、出現当初の EGS は明らかに「反言語（anti-language）」（Halliday 1978）としての性格を帯びていたといえよう。

しかしこのような認識は刻々と変化しつつある。出現当初は、深夜放送や少女マンガといった比較的周縁的な媒体で拡散し、一般メディアや公的場面では限定的使用に留まっていた。しかし後者における使用頻度が高まるにつれ、EGS とそれが指標するコンテクストの間に「典型的」かつ「専従的」な連携を見出すことは難しくなっている。この点で、EGS は集団や社会の中で、個人の嗜好に応じて変異する状況的なフォントのようなものと言えるかもしれない。ただし、（ここで述べる EGS も含めた）言語の革新は循環的なものである。大衆化によって秘匿性が失われれば、より緊密な紐帯を指標する別種の方策（新たな文字形態なりエモティコンなど）を求める意識を鼓舞することとなり、かくして EGS は流転する。しかしそこで採用される形態なり意匠は、確実にその時代を反映している。

3.2.2 使用者の自己／アイデンティティの投影

EGS の使用は、同時に、使用者の「内面的」な在りよう、つまり自己／アイデンティティを映し出す鏡となりうる。発生当初から頻繁になされた解釈は、丸文字の使用そのものが書道を典範とする伝統的な書記法からの逸脱であり、ゆえに不真面目さ、反抗的気質、非行の現われであるとするものである。1970 年代には、もはや「習字・そろばん」は不可欠な修養とはみなされず、学習塾が乱立し始めていた。しかしその一方で、字体をふくむ「良い言葉づかい」は人格的成熟の現れとする意識も根強く残っていた。その顕著な社会的反応が、丸文字の学校場面での使用禁止という措置であった。

しかしながら、公的権威の行使と規範の遵守が期待される学校という場においては、丸文字を用いることは反社会的な行為であり、それゆえに「潜在的威信（covert prestige）」（Labov 1972）を喚起することにもなった。抑圧されることで強化されるこの意識は、1980 年代まで丸文字が生き延びることを可能にする原動力ともなった。しかし、メディアの関心の高まりと（「りぼん」の付録に代表される）文房具との連携（大塚 1996）を通じて、丸文字とそこに付随する絵文字は「可愛さ」への希求を推進する媒体となった。その結果、かつての「反」言語は「迎合」言語として位置づけられ、人口ならぬ「人手」に膾炙するにつれて牽引力を失っていった。

丸文字低迷ののち、1990年代初頭に角文字が出現し、1990年代中期以降は「創作的意匠」や「遊び道具」としての文字利用が一般化していった。この時期は、ポケベルの暗号的読解、2ちゃんねる・チャット・掲示板などのコミュニティー言語の爛熟、自作フォントや「へたうま文字」、「ギャル文字」の創作に見られるように、字面通りの意味（つまり「命題内容」）だけでは捉えきれない意味作用を一層推進する方向に向かっている。こういった異なる諸相を反映する複数の社会的アイデンティティが、個別の字体やエモティコン／アスキーアートなどと結びついているのである。

3.2.3 発話行為（特に発話媒介行為）の微調整

EGS は、「主張」や「提案」といった発話行為の達成に関わるというよりも、その発話行為 (Searle 1962) が持つ「力」を調整・緩和する機能を司る側面が強い。したがって、「発話内行為 (illocutionary acts)」よりもむしろ、「発話媒介行為 (perlocutionary acts)」の達成により強く関わっている。以下の例に見られるように、EGS の操作により段階的な情意を表す場合もあれば(5a)、「頭がおかしいことを揶揄する」という行為を(明示的かつ矯正的手段により)緩和するための方策としても機能している(5b)。

- (5) a. 「すきよ」 vs. 「すきよ♥」 vs. 「すきよ♥♥♥」
b. 「ちょっと病院行ったら?」 vs. 「ちょっと病院行ったら (^_^)」

とりもなおさず、このような EGS の懐柔的操作はポライトネス方略として機能する。(5a) の場合はポジティブ・フェイスを強化する方略として、(5b) はネガティブ・フェイスの緩和策として用いられている。同様の機能は、携帯メールやチャットにおけるエモティコンの使用にも見られる (e. g. 「…ちょっと病院行ったら (^_^;)」)。

3.2.4 EGS は使用者のメタ語用論的知識を間接的に指標する

EGS は、上述のように内省や観察により到達できる機能を持つだけではない。以下の用法は、「間接指標」として、その機能とプロセスが潜在的かつ意識外にあり、隠密裏にテキスト構築上の共有知識を具現していると考えられる。この機能は Gumperz (1982) が述べる「コンテキスト化の合図 (contextualization cues)」に相当し、強く情緒を指標する終助詞（「ね」や「よ」）と同期しながらコンテキスト化を推進する (Kataoka 1995, 2003a)。

以下の図 2 (a) では、「ハート」と「汗」マーク（丸型破線）が、小トピックの境界（破線）において「ね」や「よ」といった終助詞（四角の囲み線）と同期していることが見て取れる。また図 2 (b) では、ハート・マークは一見ランダムに、紙面全域にわたり濫用されているかに見

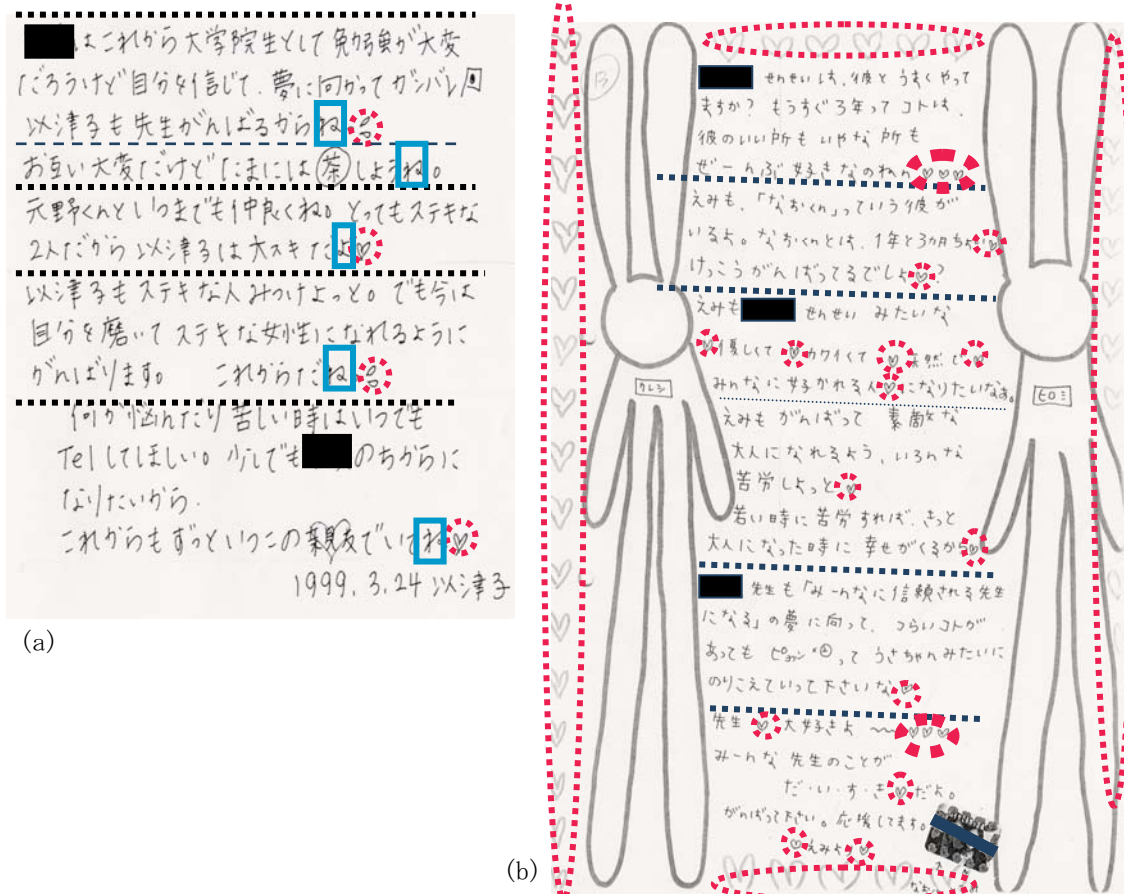


図2. エモティコンの談話構築機能 (左(a); 右(b))

える。しかしその用法は決してランダムではなく、談話の構造的な指標として機能している。実は3重連のトークンは全編を通じて2回きり、それも最初と最後のトピック境界の末尾で、「好き」というメッセージを前景化するために選択的に用いられていることがわかる。

以上の点から、テキストの特定箇所におけるEGSの使用を通じて、メタ語用論的に慣例化されたテキスト構築上の暗黙知が具現化しているといえよう。つまりEGSは、(しばしば文字形態と連動して) どのようなコンテキストで、どういった相互行為を行っているのかを「直接」指標するだけでなく、テキストの構造化を促し、構築過程のどの段階にあるのかを「間接的に」指標する媒体となっているのである。

これらの特徴は、ことばに重層的にかぶさるプロソディックな、パラ言語的特徴に比類しうる。つまり、高い声や低い声、ある種の音調や強弱のリズムと同様、ある種の字体やエモティコンの使用が特定の人物像やジャンルと結びついているのである。ただし、このような連携は通時的流動性に左右される。さらに、EGS(特にエモティコン)は書記内容を2次的に補足説明しうるという点で(たとえば「すきよ♥」における「♥」)、メタ言語的な特徴も備えている。この意味で、EGSは高度に「マルチ・モーダルな」媒体である。同時に、言語を問わず共通する

イメージを喚起するという特徴のみならず（たとえば「固さ」や「丸み」が含意する特徴）、各々の時代において好まれる形態（たとえば「丸文字」から「角文字」への変遷）があるように、文化固有の特徴を呈する。

3.3 共通の認知特性の発露としての EGS

最後に、EGS の変遷が映し出す共通の認知特性に言及して本論考を締めくくりたい。従来エモティコンは図画記号であり（それゆえ類像的性質が顕著であって）、象徴的性質が顕著な「言語」とは異なる特徴にもとづくと考えられてきた。ここでは、エモティコンも通時的な使用実態において言語の文法化に酷似した特徴を示し、言語分析的アプローチが可能な対象であることを示したい。その一例として、「文法化」という現象を取り上げる。

ここでは、文法化の一例として“go”を取り上げる(6)。“Go”は当初、(起点からの)物理的な空間移動を示す動詞であったが、より概念的、心理的な用法へと転じ、時系列における「移動」の意味から「意図」や「未来」の意味が生じたとされる。その過程で、「動詞」から「助動詞」的用途へと機能範疇の変化が生じる一方で、“gonna”のように他要素との融合も生じている。同時に、本来の「起点からの出発」と相反する“come”との共起が可能になるなど、意味的拡張／漂白も起こっている。

(6) <<I go to NP ⇒ I am going to NP/VP ⇒ I' m gonna VP>>

- より広い使用領域 (物理的 ⇒ 概念的)
- 意味的拡張／漂白 (空間移動 ⇒ 意図／未来)
- 命題の意味との不一致 (e.g. I' m going to come.)
- 統語体系への融合と分離不可能性 (“Are you going to rockclimb?” “Yes, I' m going to.” / *? “Yes, I' m gonna.”)

実はハート・マークや汗マークにも全く同様の特徴が観察される。エモティコンの出現当初は、「典型的使用」(7a, b)に見られるように、命題内容とエモティコンの生み出す連想が相互依存的で、両者が補強し合うという関係を持つ事例が多かった。しかし、近年（特に1990年代中期以降）、「非典型的使用」(8-9)に見られるように、エモティコンが命題内容との不一致や齟齬をきたす例(8)や、既存の書体と融合し、もはや分離不可能な状態となった例(9)も見出される（「パパ」の「°」や「感嘆符(!)」の「。」が「汗／涙マーク」で代用されている）。

(7) 【典型的使用】

- (a) 健二くん、だーい好き♥♥ (b) ちょっとやばいよね♩

(8) 【非典型的な使用—命題内容との不一致】

(a) とりあえず会いを求めようかと思ってるよ ♪

(9) 【非典型的な使用—他の書体との融合】

(a) パパ → /α/α

(b) 絶対だよオ ♪

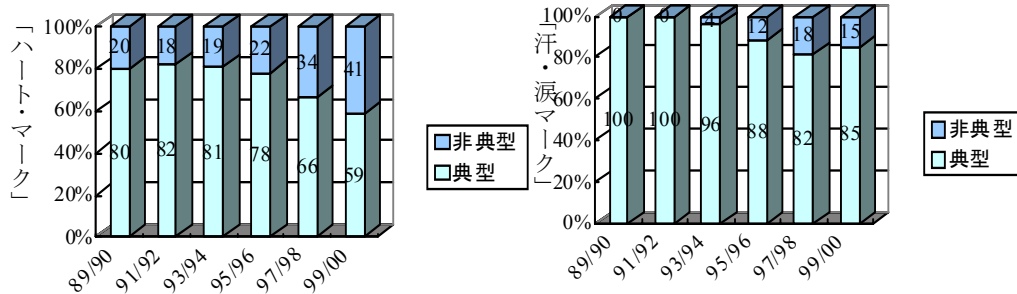


図3. 「ハート」と「汗／涙」マークの「典型的／非典型的」使用比率 (1989-2000年)

「ハート・マーク」については、8-9のような事例が1990年中期以前にも観察されていた(図3)。ただし図3から分かるように、1990年代中期を境に、「ハート・マーク」と「汗／涙マーク」双方で非典型的な使用比率が急激に高まっている。以上の観察から、背景での修飾的使用といった「使用域の拡大」(図2(b)参照)に加え、「命題内容との不一致」や「意味的拡大・漂白」、さらに「書記体系への統合と分離不可能性」といった特徴が確認でき、文法化現象との並行性が指摘できる。こういった現象は、言語変化を推進する認知的特性が、実は記号作用全般に通底している可能性を示唆している。

4. まとめ

本稿では、便宜的にEGSの3つの特徴(ただし網羅的ではない)を確認した。つまり、(1)EGSは記号的流動性に富み、刻々と自己変革を繰り返す媒体であり、(2)書記体系に遍在する「直接／間接指標」として機能し、(3)通時的な変遷において共通の社会／認知的プロセスを具現化する媒体であると考えられる。そこにおいては、言語を含む記号の普遍的特徴が垣間見られるのと同時に、日本語特有の運用も見取ることができる。しかし、EGSの基本的性格はその流転する流動性にある。今後の社会情勢や自己意識の変遷の中で、それがどのように発展していくかを考察することで、記号全般に通底する特徴の一端が垣間見えてくる可能性がある。

参考文献

- Austin, J. (1962). *How to Do Things with Words*. Oxford: Clarendon Press.
 Friedrich, P. (2006). Maximizing Ethnopoetics: Fine-tuning anthropological experience. In C.

- Jourdan & K. Tuite (Eds.), *Language, Culture, and Society*, 207-228. Cambridge: CUP.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: CUP.
- Halliday, M. A. K. (1978). *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. Sebeok (Ed.), *Style in Language*, 350-77. Cambridge: CUP.
- Kataoka, K. (1995). Affect in Japanese women's letter writing: Use of sentence-final particles *ne* and *yo* and orthographic conventions. *Pragmatics* 5: 427-453.
- Kataoka, K. (1997). Affect and letter-writing: Unconventional conventions in casual writing by young Japanese women. *Language in Society* 26: 103-136.
- 片岡邦好 (2002a). 「指示的, 非指示的意味と文化的実践」 『社会言語科学』 4(2): 21-41.
- Kataoka, K. (2002b). Emotion, textual awareness, and graphemic indexicality. 片岡邦好・井出祥子 (編), 『文化・インターアクション・言語』, 215-242. 東京: ひつじ書房.
- Kataoka, K. (2003a). Form and function of emotive pictorial signs in casual letter writing. *Written Language & Literacy* 6(1): 1-29.
- Kataoka, K. (2003b). Emotion and identity in personal writing: Analysis of pictorial signs and unconventional punctuation. In J. K. Androutsopoulos & A. Georgakopoulou (Eds.), *Discourse Constructions of Youth Identities*, 121-149. Amsterdam: John Benjamins.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜—社会記号論系言語人類学の射程』 東京: 三元社.
- Labov, W. (1972). *Language in the Inner City*. Philadelphia: UPP.
- 三宅和子 (2005). 「携帯電話と若者の対人関係」 橋元良明 (編) 『講座社会言語科学 第2巻 メディア』, 136-155 ひつじ書房.
- Ochs, E., (1992). Indexing gender. In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.), *Rethinking Context*, 335-358. Cambridge: CUP.
- 大塚英志 (1995). 『「りぼん」のふろくと乙女ちっくの時代』 東京: ちくま文庫.
- Peirce, C. S. (1955). *Philosophical Writings of Peirce*. New York: Dover.
- 榊原昭二 (1994). 世相語散歩 93. 『月刊言語』 23(1) : 91-92.
- 佐竹秀雄 (1980). 若者雑誌のことば: 新言文一致体. 『言語生活』 343: 46-52.
- Silverstein, M. (2003). Indexical order and the dialectics of sociolinguistic life. *Language and Communication* 23(3-4): 193-229.
- Silverstein, M. (2004). 'Cultural' concepts and the language-culture nexus. *Current Anthropology* 45: 647-648.
- 山根一真 (1989). 『変体少女文字の研究』 東京: 講談社.